

第 119 回 歴史リレー講座「古代の草刈と稲刈—万葉びとの生活—」上野 誠氏 (R6.8.18)

私はここ 9 年ほどは毎年お盆のころにこちらの講座でお世話になっています。そこで思うのですが、すっかりなじみになった明神山に外国人観光客を呼び込める可能性は高くはありませんが、ゼロでもありません。そのためには、「ここは日本の古都や『万葉集』にも詠まれた明石海峡を見渡せる素晴らしい場所だ」と、日本語と英語で説明をしたうえで、「日本の源流に触れたんだ」と彼らに実感してもらうことです。もののありがたみは知識によって生まれます。奈良で歴史を学ぶことは歴史を実感することにほかなりません。

さて、きょうのテーマ「刈る」という労働ですが、日本の農業の特徴は世界最北の稲作地域で行われていることです。そしてその最重要課題が草との闘いなのです。刈り取った草を無駄にせず屋根、戸、壁などの建築材や肥料に活用する。これが私たちの先祖が編み出した暮らしの知恵でした。同時に、実に複雑な水利権関係のもとで水を分配することも特徴です。古代大和には山に沿って作られた水利権組合ごとに葛城氏、平群氏、春日氏、高市氏などの豪族が誕生しました。彼らはひとつの川の流れを制御したうえで、農法を決定したのです。また、その場所には箸墓古墳あるいは佐紀盾列古墳群などの巨大古墳が造られました。

5 世紀になると、天皇は土地所有をしないという合意形成がなされ、そのかわりに天皇家は国民から敬われることとなります。その結果、各豪族は競って姫を天皇家に嫁がせました。

『万葉集』を丹念に読み解いていけば、当時の「刈る」という労働が理解できます。農業における最も重要な祭りは大嘗祭です。天皇が即位儀礼を行う際に仮設の建物を造り、天皇が神様にお食事を差し上げます。建物は板葺でも瓦葺でもない草葺、すなわち茅葺です。

ここで、草刈りを詠んだ万葉歌を紹介しましょう。「この岡に 草刈る^{わらは} 童^{しか} 自然刈りそね ありつつも 君が来まさむ み馬草^まにせむ」（この岡で草を刈っているこどもたちよ、そんなにたくさん刈らないで。このままにしておいてあの方の馬草にしましょう）。「我が背子に 我が恋ふらくは 夏草の 刈り除^そくれども 生^おひ及くごとし」（私が夫を恋しく思う気持ちは、刈っても刈っても生えてくる夏草のようだ）。

太上天皇や額田王の歌には仮廬^{かりほ}（茅葺製の仮の建物）が詠まれています。聖武天皇と元正太上天皇に用意された仮の行宮はススキの穂が下に垂れるような秋らしい演出が施されていました。

一方、農業用の仮廬は稲の盗難や猪や鹿などの獣害防止用に作られました。人々は田植えの時期に仮廬を建て、収穫時期には仮廬に寝泊まりしながら見張りや稲刈りに勤しみました。この状況を目にした天智天皇は「秋の田の かりほの庵^{いほ}の とまをあらみ 我が衣手は 露にぬれつつ」（仮廬の屋根の「とま」の目はとても粗いので、私の袖は雨で濡れてしまいました。このような場所で過ごすのは大変ですね）という慈悲の心を詠っています。ちなみに、秋の収穫後の仮廬は別の場所に保管され、翌年に再利用されました。

何より重要なことは大嘗宮が仮設的建造物であり、仮設自体に意義があることです。民俗学者の折口信夫は「大嘗宮は神聖な稲の魂がやどるところである」と定義しました。人は儀式ごとに新しい人生に踏み出します。即位した天皇はそれぞれ一世一代のまつりごととして大嘗宮を建て（建築儀礼）、その中にこもり（中心儀礼）、終われば速やかに取り壊します（破壊儀礼）。一連の流れは草の上で生活していた時代に戻るということであり、「神は来りて去りたまふもの」という思想そのものです。

藤原宮でいえば、中国的な宮殿（瓦屋根、朱塗りの柱）を造ったあとにわざわざ宮の庭に茅葺の建物を造ったことも同様です。日本文化は人々が草や稲を刈るなかで培われてきました。このような伝統が少なくとも大嘗祭では藤原宮から確認でき、現在もなお大嘗宮は草葺であることが求められています。